

門 73
號 6665
卷 3

裝束

要領鈔序

紀稱

神世投御冠於安河邊織神衣於
齋服殿衣冠之權輿其來也舊矣應神
帝效百濟衣服以少草其製廐戶皇子
始定冠位十二階大寶以降沿唐衣服而
其製大同小異蓋本邦通中華也始于
漢盛于唐世時朝廷命賢臣因循于往
古之衣冠而折衷于漢唐之製其好者沿

裝束要領鈔序

早稻田大學圖書館
31.9.28
藏書

焉不好者草焉而為 本邦之文物千歲
不易之定式也如宋景濂語曰子來猶效
漢衣冠元是 本邦之古傳也豈效漢唐
之製而已乎顧夫聖世始為衣冠而美凡
俗以正上下禮儀人而無禮儀則何
人為 豈非當務之急乎然其典故舊籍藏于
搢紳家而不能行于世奎井義知氏有概
于此故索搜 本邦正史及諸家典籍群

以拔之精以萃之不雜片言半句之臆說
而成一書矣學古禮者就世而正之則豈
有孫衣黃裏之失乎義知子者予之故舊
也乞請之序故為之云云
正德丙申孟春望日牛山翁香月啓益甫
揮筆於京師為第街寓居



装束要領鈔後附

女官

女房の衣裳并番振乃次才古今相違れ事

女房の衣裳古今の記録異同有りていあへ今のやう
各別なり。さき番振の次才も亦相違せり。昔古来今
事物乃沿革此一事のそおりに時世も通るかくれ
おられたの事はほいひい迹乃さぬ。四季はか
くくおあろり。陸ていあへ有。あつたは
物語。と女房の衣裳もくくして。あつたは

さしすもふもふ多れし今のおろひも多し
畫土も是とあやまりいあへるとに
いあへにいりるんかてあまとう
及及一ぢれ樹ウチキといつる身に着るふ所の服に
衣ともいふ是なりけ樹の下に草うへは打衣
とりかきひて表着と着くおひて袴と着
あゆひくもりのくさぬ着て裳と付りい
着居の次才凡かく乃あく其申か
禁色れ又同何り色中され上らるれ女房例乃

また何の乃唐衣よ地よりれ裳うと記す
して蕙芳なれ織物あり又ゆりぬもは
は織物のかくさぬうと記ゆりて着るつ
帯いりるんの色は唐衣りるんか
袖りのさされりなりと古記よんえ
と藤小と着まてゆりて中藤と下
文といあ一色い志ぬくさ
衣よハ名も記ひて文と月ひら
これとも主人乃うり記くさぬ
松重よハ名も記ひて文と月ひら
よハ名も記ひて文と月ひら

いろりりとして又つおしり別りりなるも可なりかき〇括
 下に又とういぬやうにきゆるき古来の有職おしり
 かりと承りぬえうりの時ハ裏ハ古儀乃おしり形
 〇又つおしり同しきぬ乃時ハ丈も皆おしりさ也
 又かとりにも名にりきぬなりハ文ろしくれ名
 〇さうふ紗しきぬの長さ女房の官位よりて長短
 ありや女官筋抄ハ長さぬのしけハ八尺九寸と見たり
 又雅すけ装束抄ハ下仕乃衣長きと六尺六寸袖くら
 二尺一寸と見たり今世の履ハ長きと

〇むとハ衣冬よりふいと薄かりなるもかき〇括と
 ひわたりなり但衣ハ板引冬ハむと人けりて衣の
 下に夏せりたり

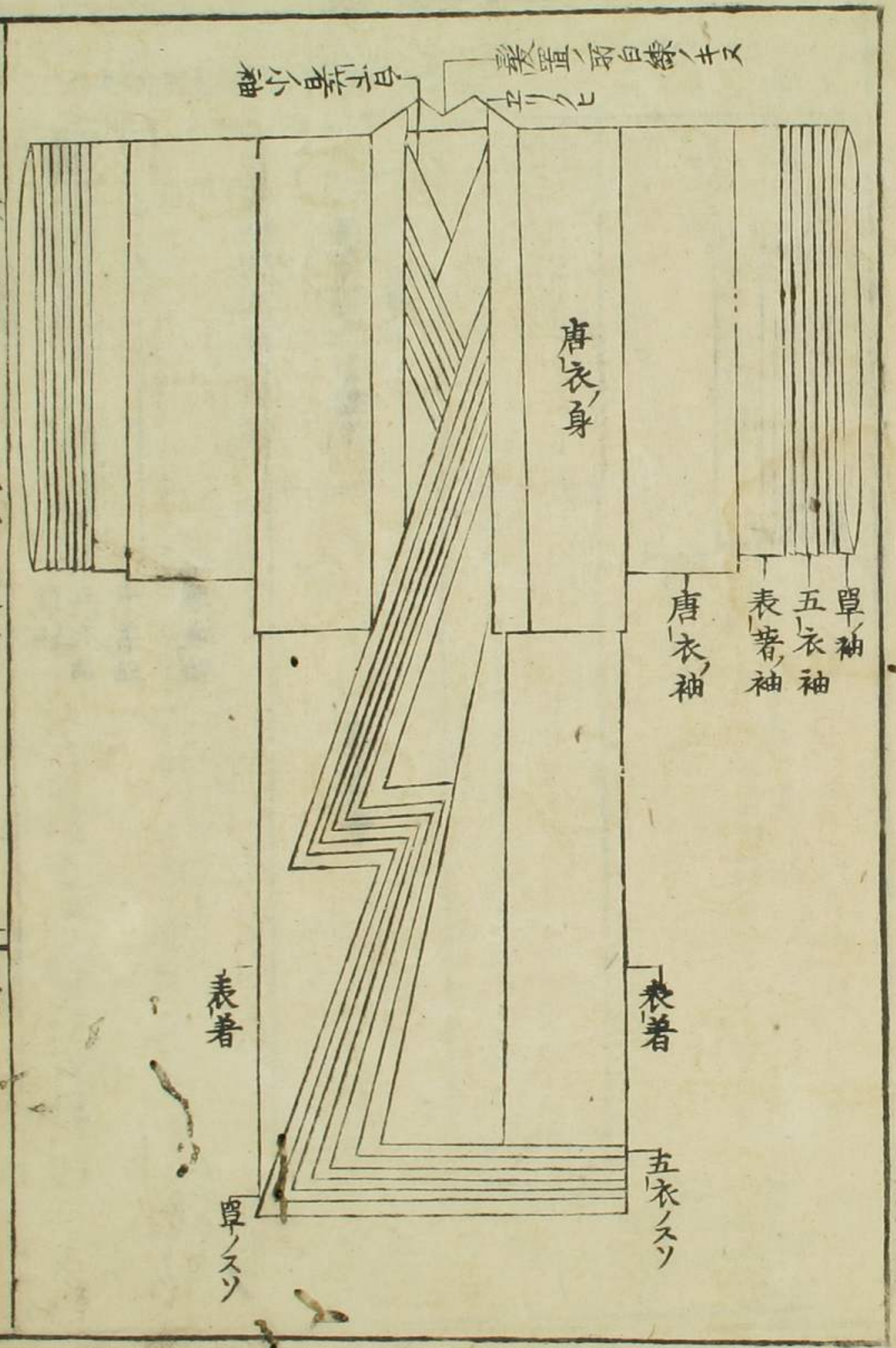
〇打衣紅乃あやと打てかき〇括は雅ハ濃打なり
 夏冬にかき〇括引つらふ時又つさぬ乃うん
 かき〇括は今の世にハ暑せらるるやんて
 濃打とは本式紅乃濃打ハ世ハうん
 〇かき〇括は雅すけ装束抄ハ見たり

の袴抄は小掛を小袖と申すことあり給なり
 紅乃より袴をいませりかんと但雅すは袴末抄
 にしめぬれりしは酒あつと九尺みすとすしり
 却てかきまふはふくはんあはしり袴はつらめ給
 ありしは酒なりとすなり

○裳白羅ラの裳地チ摺乃裳スソコノ。纈纈裳ユケケウ。目染裳
 つらく西官記み及なり給に今乃世にいはれ
 裳の中に纈纈とすしり各別のおあり是も
 子細いふはしり乃纈纈とすらるはくは里給

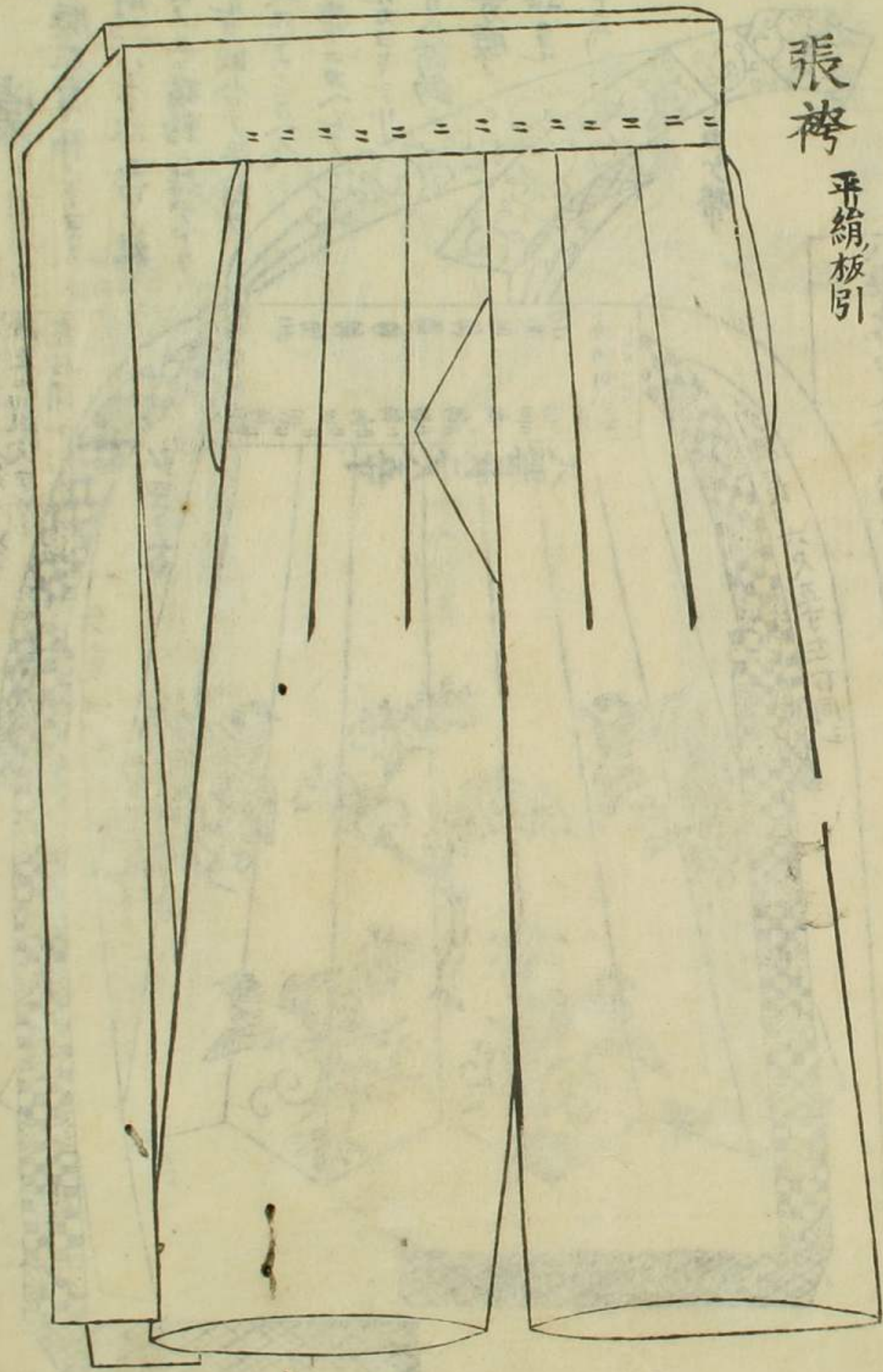
の事なり雌結メスツ雄結オスツありて纈と纈と別なり延喜
 縫殿寮式より及なり衣服令義解み五色の交練マシ以纈
 乃文とほくるとしひ和名抄ハ帛マと結て文練とす
 孫愔日繒カサリの夾花ありとすなり凡纈纈ハ裳に
 らとがしめぬとすなり各々色々の地とす
 深よするすありと承りし裳乃長短も人々
 差別ありや女房装束抄ハ裳のありとすは二丈五分
 あり引しうたありもんちいさたはるはくはん小
 こしにひくははる袖大やうらうらぬの袖あり

出さるる物とする也ししむゆと糸よとをさねにりり又
 申りたる人等も人のいふとさる時をたるとし腰と
 うに織物うへむい人の只乃あや文らいつりし
 文ハ生乃うとかり物それむとく又乃うと物冬と大
 うし引揚うへやうしと引この長さ一尺五寸おほ
 腰乃冬と二尺ぬす小襦の長さ一尺三寸中倍いふと
 強なり冬六つまもかめうへしひし人裳及ひひり
 りとぬし大腰の廣さ四寸五分小うし此むりし二寸分
 りしむりし二寸五分ひしむりしとめりしり



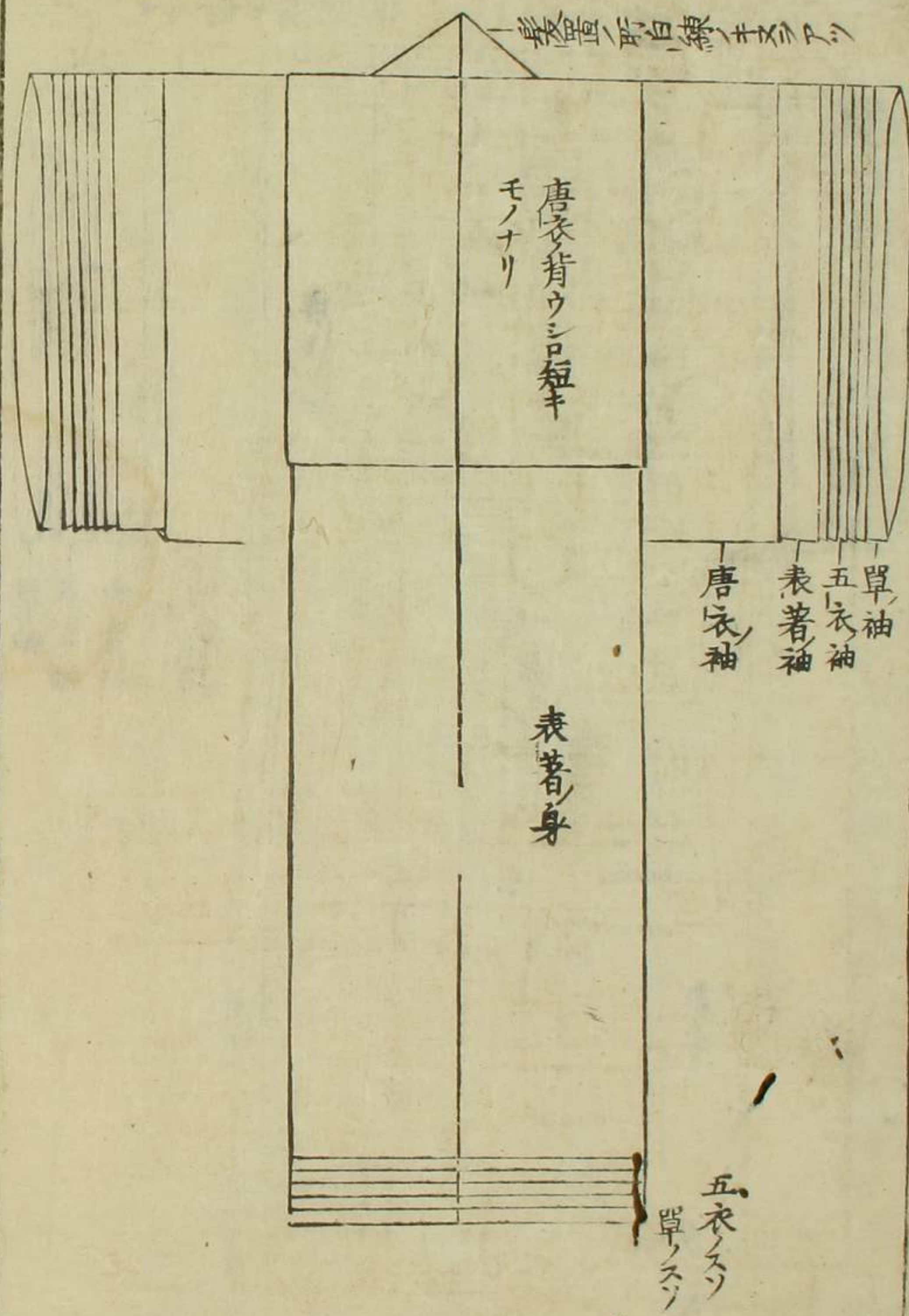
裁縫要領

唐衣要領少後付



張袴
平縮板引

唐衣要領少後付



唐衣背ウシ口短キ
モノナリ

單袖
五衣袖
表著袖
唐衣袖

表著身

五衣
單ノス

唐衣要領少後付

七

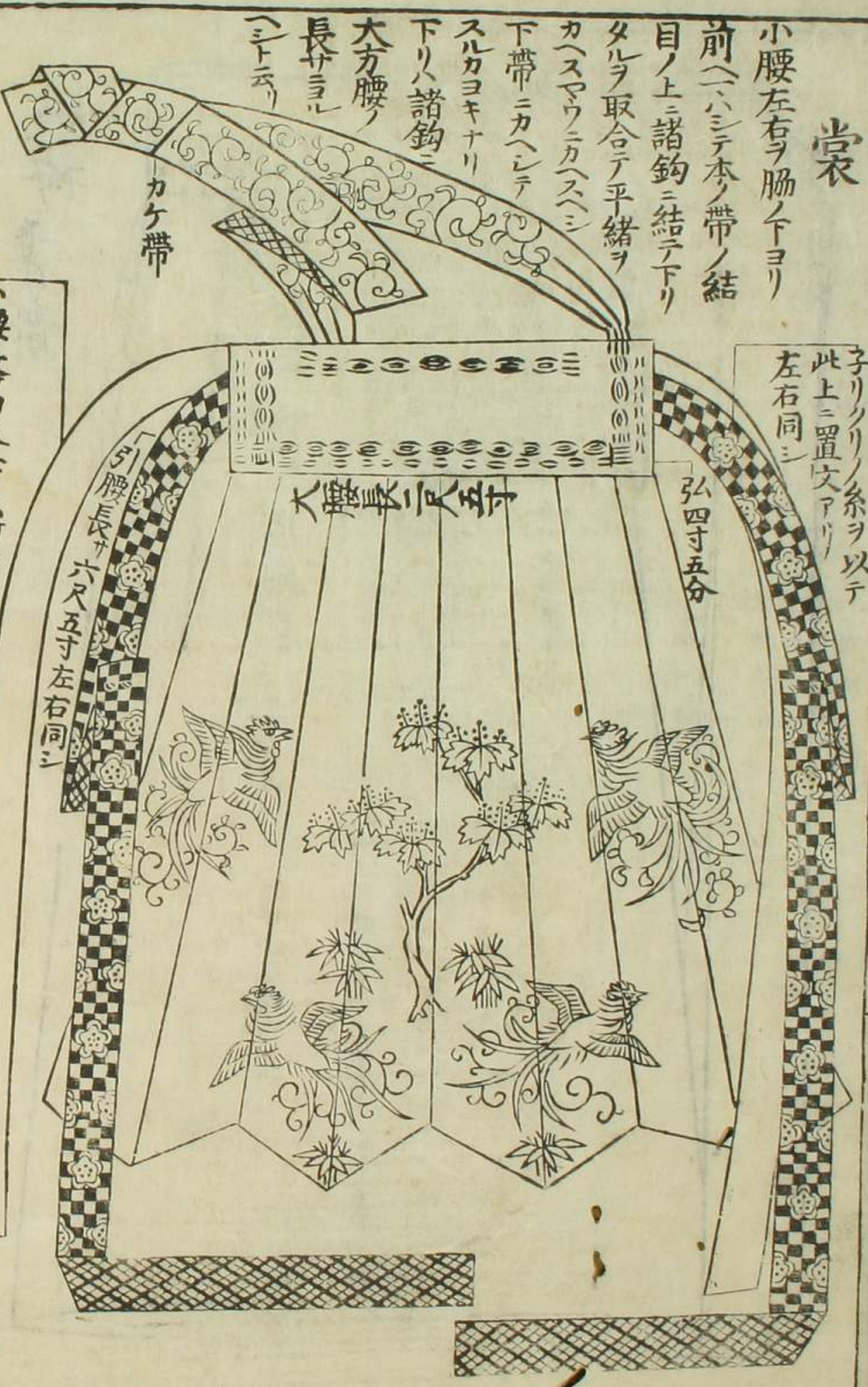
此上ニ置文アリ
左右同シ

裳

小腰左右ヲ脇ノ下ヨリ
前ニハミテ本ノ帯ノ結
目ノ上ニ諸鈎ニ結テ下リ
タルヲ取合テ平緒ヲ
カヘスマウニカヘスヘシ
下帯ニカヘシテ
スルカヨキナリ
下リノ諸鈎ニ
大方腰ノ
長サ三
三ト云

カケ帯

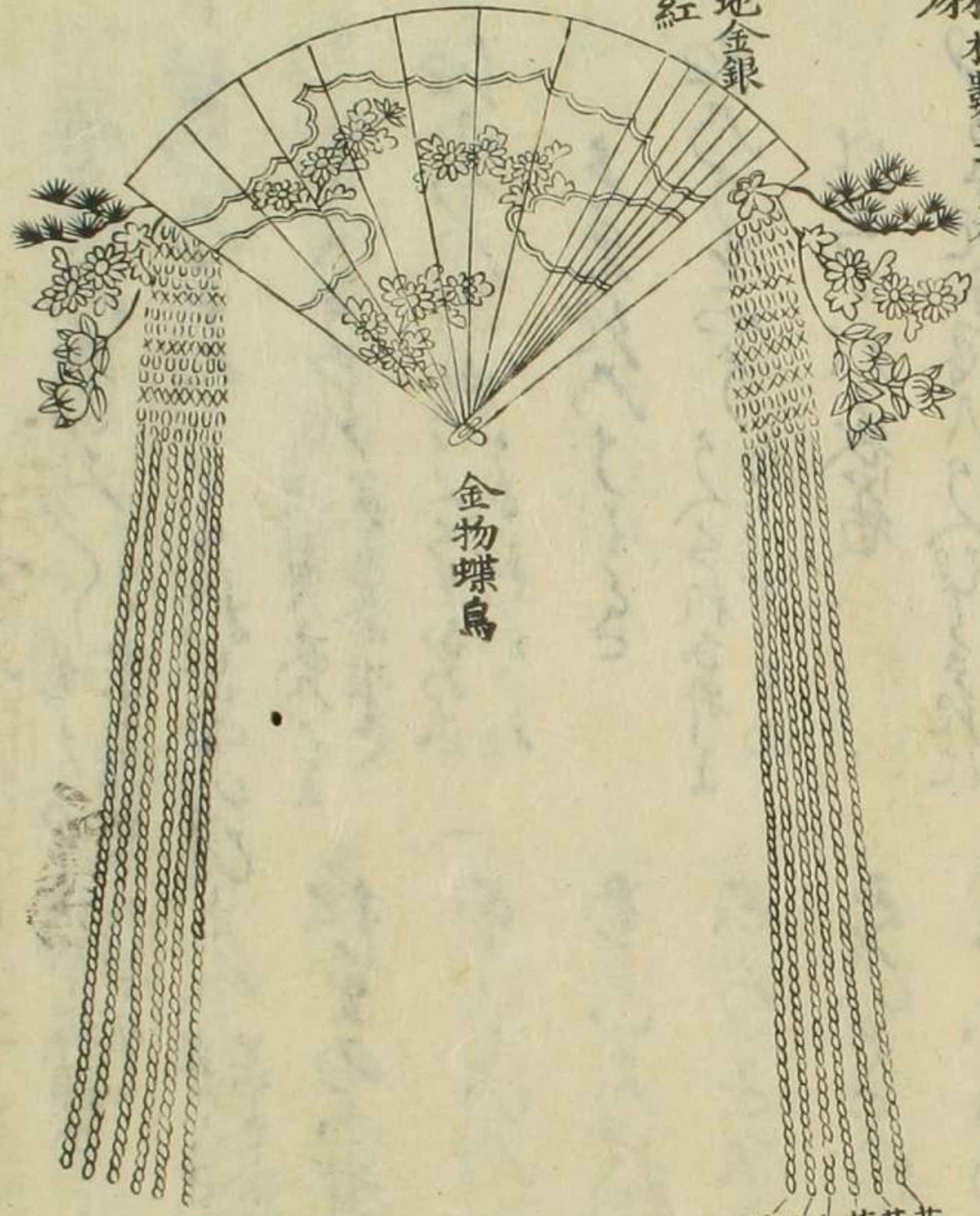
小腰長サ四尺三寸弘サ二寸五分左右同シ



柏扇

板數三十九枚

惣地金銀
妻紅



萌黃
薄紫
紅
白
紫

右同シ

此上ニ置文アリ
左右同シ

○あーの衣裳かき袢やう四季にうらさ

春冬乃衣のりく 是より下桃華禪閣の女官諸抄の抜萃なり

○皆紅乃さぬ 単はさぬの下に くれおのひと人 是を余皆准く

白さうりた 表著ハ衣乃とよ 松堂の小掛 小掛ハ表著のとよ

○紅乃ひの衣 うらさあわふ あうとい乃衣人

もえん乃うらさ あうとい乃衣人

○お乃うとやう うらされお井よ 志乃さひと人

はらうれ表著 あひそめの小掛

○ひらさねおほひ うらされに くらさお乃おと

うらされのうらさ うらされに 蒔黄乃小うらさ

ひらさねのうらさ うらされに くらさお井のむと人

りえらされうら うらされに 紅梅れ小うらた

○梅のきぬ うらされに すもろ乃ひと人

あうといのうら うらされに けうい乃のこうらさ

○ははさ紅梅 うらされに あうとい乃と人

とをされれうら うらされに あひそめれ小掛

○裏はさりれ うらされに まはり乃と人

わらさのうら うらされに あうとい乃小うらさ

○あうそいかに花

あひそめれうらら

○紅梅おほひひ うらら紅梅とまぬ

ゆえさねうらら

○屋なだ かりてあらく

振りうららの表意

○はくらかさ かりてあらく

紅梅乃うらら

○やまふれおほひ 山ふらの表意

あひ深の小うらら

ゆえさね小うらら

はきりたるむら

あひうめの小樹

あきふわ乃ひと

うららあれこうら

くれな井の草

すさくれ小うらら

あそだ花と魚

とてあそこのうらら

○花山吹 かりて花山吹

うらら山吹乃表意

○裏山 かりて裏山

魚陵乃うらら ギョレウ

○紅梅 かりて紅梅

おかさのうらら

○は 表意

○花 表意

あひ深の小うらら

紅梅 あひ深の小うらら

あそだこうら

何をさむと魚

あむらめ乃小樹

あそだ花と人

山吹の小うらら

全母 単。表意小樹は乃は不審

くれおわ乃ひと

うら山吹のうらさ

○久く又為久。といふ。お梅

紅梅乃うらさ

くらがねれむとく

○うら白紅の濃為。二重。まゝいれうらさ。二重。うらに七つがめり

多積お井のむとく

すくすくれうらさ

りしれ乃小うらさ

○白うらうら。まかま。と

あろさむとく

ころもいのうら

くらがねのうらさ

○松うら。うら。紫

紅乃花雪梅

色えさのうら

とらうのうらさ

○かかりてすく

りしれ乃むとく

はくすれうら

柳乃小うら

○さかりて萌本

くらがね井のひとく

紅梅のうら

すくすく小掛

○志かりてすく

りしれ乃むとく

色えさのうら

ころもいのうら

此中。梅。紅梅。十一月。又。節。より。二月。まで。櫻。山吹。ハ。三月。中。まで。散。る。三月。は。月。と。り。に。家。の。うら。さ。

時とさしめとて四月に何とせのふりよるひの
 以後く被りらひいさめの地を唐織物二重織物
 只乃のり物あやらぬ事とて子細あつて
 常はかほやきうらうらとてかへて又衣あつて
 唐中縫つて唐寄の七も八も又十も何れよりかたは
 らぬは只今の人のみよりかへて用ひいとて又うら
 らぬ一冊単とてかへて用ひ二三かたの
 子細なうらうら小うらうらとて二重織物又四重織物
 とて用ひとてあや

夏乃とてめれ衣いろく

○菘かさね

白糸とてこれとて

松のきりぎりす

紅の小うらま

○卵のうらうらとて

白とすの草

くまの井水菘着

赤ひとめれ小褂

け糸乃色く出ぬ志はふか好し四月申に何とて
 のふりよるひ草の衣更乃むとて人々精好のすし
 いつまあとかきうられい又かき茂葉の日のま
 又衣とりらひと事とて

五月又目より秋まで此のぬのりく

○あやめれひとくさね 表を掛 すらうのうらね

二あわ乃小うらね

○花搦のむとくかさね 表を掛 ちねのうらね

とらうれこうらさ

○かてしこれひとくさね 表を掛 とらう乃表著

紅のこうらさ

○萩芳花 後のうらね とらうのうらね

二河乃小掛

○萩のたてまのむとくかさね むとくさね 女帝花の小掛

すらうれうらね

○萩乃むとくかさね むとくさね とらうのうらね

夕徒乃井の小うらさ

○女郎花のひとくかさね 表を掛 紅のうらね

あつらひのこうらさ

○うらねをうらねむとくかさね あつらひ ちねのうらね

松かさのれ小掛

○紅乃花とくかさね ちね 二あわ乃表著

くら糸の小うらた

○二藍れむくかき

女帝花のうらた

すうろこころらこ

○赤い深のひと魚かきね

志流る表着

冬結お針の小掛

○志ろこむくへうさ糸

紅乃うらた

わら井れ小うらま

花とへかき○うらへいすくこれ織物或うすまは綾
下はあやのひととむりかき○うらまは下は綾

平絹のうらま物ならぬゆらゆら又綾と何れかと深うら
ゆらゆらなりあやめうらたは六月中かてこき
六月まで女帝花藤を祇堂の舎より秋のうらめと
かへくは表着小うらたは皆さくこれ織物或ハ二重
織物をと上はゆらゆらひらひらなり

九月九日よりれきぬい

○菊をみら又何れかめても又ねすくはうらた綿
入る月ひいよをほはゆらゆら

十月より糸五節まゝあはれぬら

○菊乃清衣 うへみすのうしろ

あまのひらへ

芙蓉裏のうしろ 表芙蓉

龍膽乃小褂 表すず

○紅葉重八 芙蓉三山吹のうしろすすこころの紅葉あさうすれ

くまお井乃むしへ 菊乃うしろ

芙蓉くれ小うしろ袋

○白菊 れめてあろ

紅の花ゆへ

芙蓉くろ乃うしろ

そつうれこころき

○芙蓉 れめて芙蓉

くまおのの目へ

あろこころき

あひほ乃小うしろ

○うしろのひらへ おりに中袋

紅乃ひらへ

松重れうしろ

あまの井小褂

○芙蓉のみら おりに芙蓉

くまおのれ花と魚

すつう乃うしろ

あまの井の草

○こころ紅葉 れめてすつ

すつう乃小うしろ

あひそめれ表着

蕙芳れむしへ

○かえておん 表うし

あひそめのこころき

紅乃うしろ

けおれうしろへはさねはまをれ乃おにきりかひらぬ

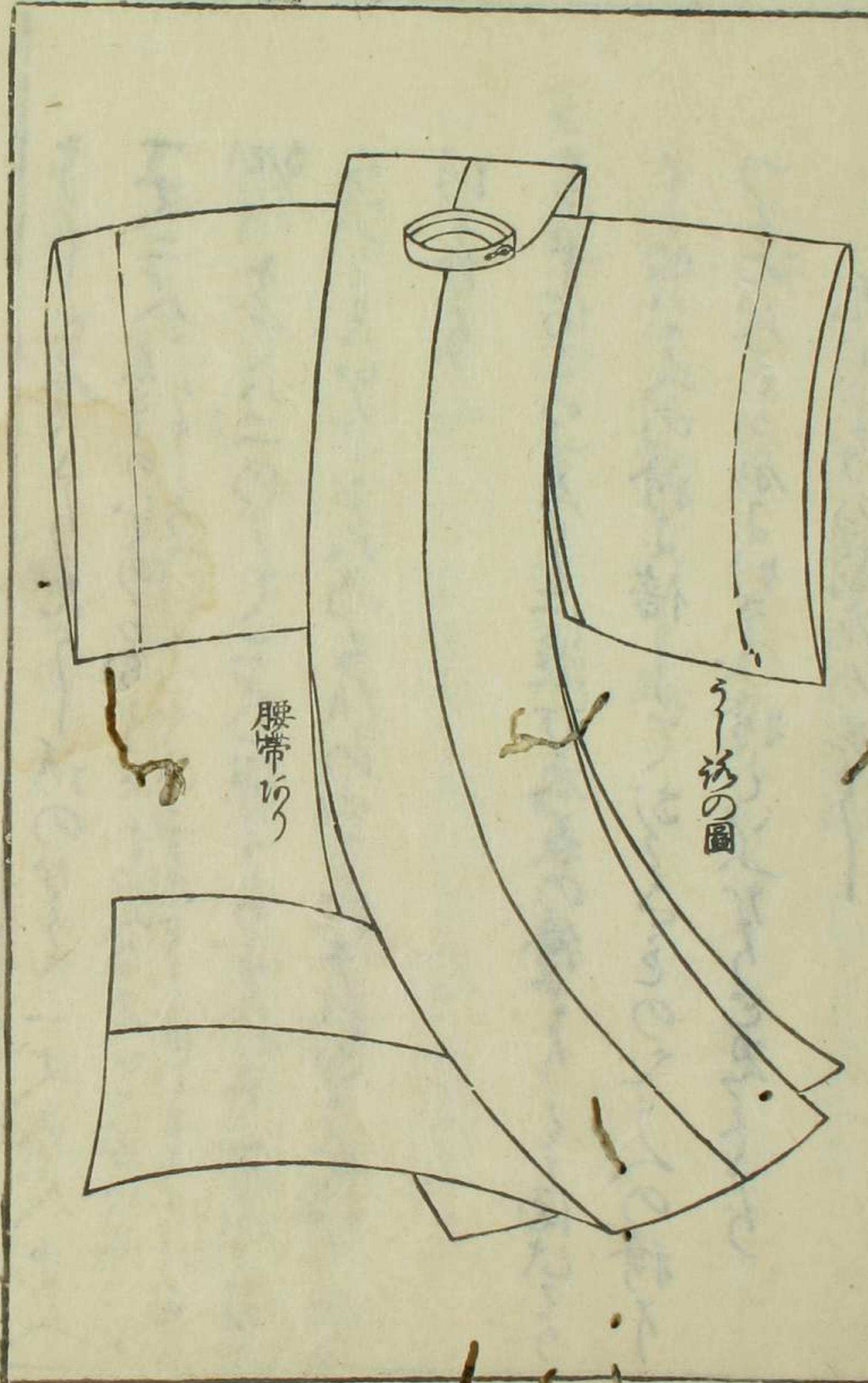
以上後成恩寺殿下乃活袖のうらより志珍一也
 今按 かつ衣より肘ハ小うらまゝハもらひらまははくそ
 一く上に志珍一也
 以上ハ女のほろそくれま

○かさ人の童女れうハまゝるちりせれまぬなり枕きうりに
 襦乃くまゝ前葉あゝもいざとひうくかさみなりく
 ちりひさてとつひ又まははくはくまゝ友ハま折葉
 くらもこのり新葉集ハ舞昌の尋
 ぬらん乃らまふなるけし女子ハかさ人乃すそれかうそせ

きうとみよりれう活のなうま一丈み尺ま
 一丈二尺 きうのてのらあか うしく入下人と左の脇乃下
 ひくまてハ二の^マとして二尺二寸うちまは二尺三寸
 くらひまかりまぬ乃くらひのやうにまはかりおほくひも
 ありなり

○甚早にゆめすう二濃打衣表の袴よりえうあはく
 ともぬかうへの袴ハ倍してあうことこのくらの袴ハ
 つらぬぬるぬよかさの袴といふなりこゝろこゝり

九かさ人の圖花乃



この図

腰帯あり

○細長ハ狩衣のくひをこれよりいそぐ三つづりの物あり
 凡身のくけ官尺同寸袖のたせ一尺六寸也表白裏をひ
 條なる綾接の細長 文柄もすし さくま し 幼童皇太子及殿上
 ハ。童女多る物也兵範記保元三年正月廿九日今日關白殿第三
 若君御元服事つり若君御装束細長袍指貫とめところ
 着是罔腋かるとさくは又女房装束抄建曆元年四月十日、
 若君の真菜姫若白重織物の細長同く織物れ小袖二重
 細長と用り付あこの務と用ひと是先例也と見たり

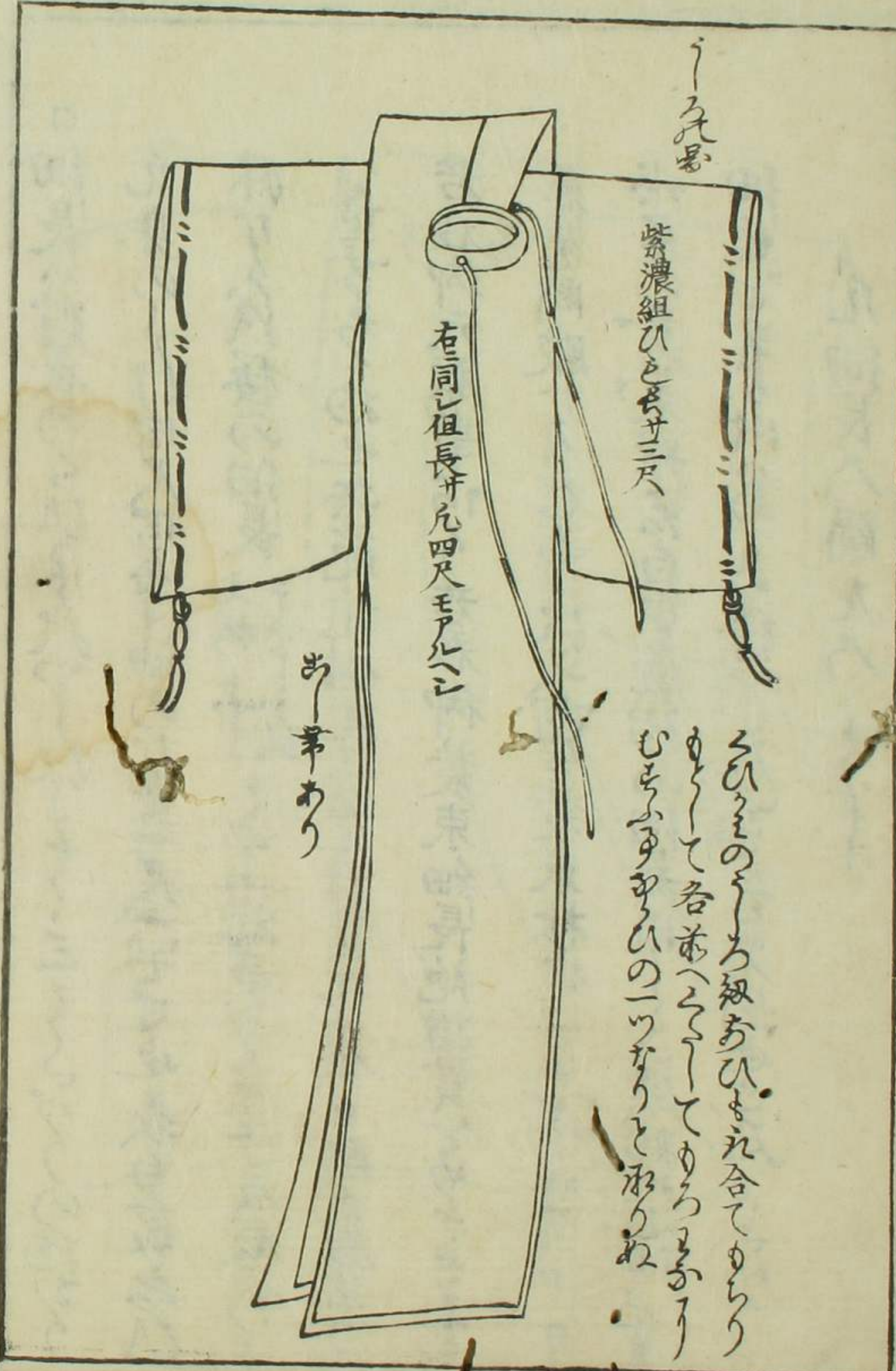
凡細長乃圖在乃

うろは

紫濃組ひとぎサ三尺

右同祖長廿九尺モルハニ

あきあり



ふひとのうろはひもれ合てもらり
 ちりて各赤へててりてりてり
 じきふ甲ひの二つなりと形あり

師説曰或人同細長ハ御産衣めと月ひちふ屋うに
 形りぬ然るハ日ほとぬ委子細ち已あてり
 ちる人ち儀ひと蓋元永二年或秘記五月廿八日
 皇子降誕六月二日の日次曰今日第五夜なり院より
 御養産乃事たり威儀清膳献の沛衣案二脚宰相作法式の
 巨へこれと昇件の沛衣と銀泥とぬりてとと
 ぬ乃洲濱同スハニき痛龜小松とけく折立ハ龜甲
 乃白織物と月ぬ下机ケソウ花足面ケソウ下機甲れ織物と
 ととぬ泥ぬりてとぬとぬり貝小ちとけく又

養老令金部附

一七

鷺あゝの案二脚同しく非泥とりて是とぬり

皆白銅ヒマコトウ乃令持ガナミありヨスミ白紐ヒメ総とつせ面ヒメ白大

文乃薄物と押下給ヒメりり白いと紙りて小号等と

ぬふ管一合に八織物乃御衣一襲と納む三重葵乃

重ぬ織物の一合ヒメよ八織の御衣一襲紙ヒメるヒメむ三重葵乃

入帷ヒメりり一合みは緩乃御襠ヒメ襦二帖平絹の活襠襦

一帖と納せ各二幅長一尺又一合色目おみおぬ文小文と

已上各白織物のつと伏組案一脚よ二合

紙と各肥オホヒあり三幅長一尺白いと紙

りて小号折枝木とぬふ第一筋調進ヒメせむ花飾

乃美ヒメあゝく俗眼のヒメかヒメふヒメ下ヒメりヒメはヒメとヒメるヒメより

おれけ記ヒメよ八只織物乃活衣緩ヒメ此御衣とヒメりヒメるヒメ

細虫ヒメとヒメらヒメくヒメとヒメ從故實此人ヒメおヒメりヒメぬヒメとヒメりヒメ

と形りぬ

